２０１９年度　南アルプス市立大明小学校　校長通信【家庭数配付】

大明小学校 校長室から

令和２年２月１３日
Ｎｏ．６０
文責 校長 飯久保一男

子どもの自立

自分で自分のことを決められない若者が増えているといいます。大学を選ぶときや就職・結婚のときでも，親が口を出し，親が決めるケースが増えているそうです。

大学…大学のオープンキャンパスというのは，本来は，高校生が大学を見て回って，模擬授業を受けるなどをして「どこの大学が自分に向いているか」を体験する機会です。ところが，相談コーナーでは，子どもはほとんど無言で，親のほうが一生懸命に「うちの子はこういう子で，だからこの大学がいいと思って」とひたすらしゃべるそうです。親が極めて熱心で，子ども自身はそれほど積極的ではない，こんなケースが増えているといいます。

就職…子どもに任せておいたら，ろくな企業に行かないだろうということで「本当にその会社大丈夫なの？ どんな会社なの？」と口を出し，ほとんど親が就職活動の中心であるかのような役割を果たしていることも多いそうです。最近は，さすがに面接などに親が出ていくと採用されないのではと控えていても，入社した後に，親がどんどん子どもの会社に連絡をしてきて，上司に絶えず連絡を取っているというケースもあるといいます。

結婚…結婚となると，さらにその傾向は強いようです。放っておいたら，いつまでも恋人もつくらない，結婚できるのだろうかと悩んでいる親は多くいます。今，親が中心の子どものための婚活（結婚するための活動，結婚活動の略）パーティーが行われているといいます。つまり，子どもの婚活パーティーに親が自分の子どもの写真を持って参加するのです。

子どもは，いつから自分の判断で自分の進むべき道を決めるのでしょうか。子どもというのは，大人として扱えば，だんだん大人に成長していくものです。しかし，周りの大人が子ども扱いをしていたら，いつまでも子どものままでいるものです。人はラクなほうに流されます。大人になるよりも，子どもでいるほうがラクなのです。その甘えを親が引き受け，一つ一つのことに親が手を出し，口を出ししていると，子どもはいつまでも自分で判断ができないままです。これはとても危険なことだと思います。

子どもの成長の途中で，手や口を出したいときに，じっと我慢をすべき時期があります。しかし，いきなりそれをやるのは無理があります。それまで全部手を出し，口を出していたのを急に「自分のことだから自分で決めなさい」とされても子どもは困るだけです。小さいうちから「自分のことは自分で決めさせる」必要があるのです。何でも親が決めて，自分で選ぶ力を親が奪ってしまう…，そのツケはいつか回ってきます。

そもそも「自立」とは，どういうことを指すのでしょうか。広辞苑には「他の援助や支配を受けず自分の力で身を立てること。ひとり立ち」とあります。「自立」と聞くと「自分のことは自分でできる」「自分でお金を稼いで生活する」といったイメージがあるかもしれません。確かにこれも，自立のひとつの定義ですが，

「子どもの自立」は少し意味が違ってきます。両親や祖父母や兄姉などの家族，先生，地域の人，友人など，さまざまな人たちに支えられてこそ，人は生きられます。自分の力だけでは生きていけません。このことから，「子どもの自立」とは，「自分ができないこと，助けてほしいことを，素直に人に言えること」ともいえるのです。

逆に考えると，子どものうちに「自分のことは自分で決める」経験をさせて，たくさんの「困る経験」を重ねることが大切であるということです。そして，自分が困ったときに，困っていることをきちんと伝えて，助けてもらい，助けてもらったら，感謝を伝えること，これが大切なのです。それが自立へとつながります。

ところが，子どもが忘れ物に気づく前に，親がランドセルの中身をチェックして，「リコーダーを忘れていたから入れといたよ」と子どもがすべきことをやってしまう…，習いごとへ通うのに親の運転する車で行き来し，子どもはお客さんよろしく，車内で悠々とゲームをしている…など，子どもが困らないよう何かにつけ先回りし，お膳立てをしてしまう…，これでは「自立」につながりません。自分でできることは自分でさせる，たくさんの「困る経験」をさせる，その中で，必要なときに「助けて」と言えるようになることが，本当の意味での自立の第一歩だと思うのです。

※参考　「自分がない大人」にさせないための子育て（諸富　祥彦:著）
脳科学からみた男の子の「ちゃんと自立できる脳」の育て方（成田奈緒子:著）

※次号以降２回にわたり，子どもの自立に関わる内容を書かせてもらいます。

早稲田大学名誉教授の加藤諦三さんのコラムです。

※わかりやすくするために，一部言葉を変えてあります。

子どもが体調を崩して食欲がない。子ども自身も何かを食べた方がいいことは知っている。

母親Ａは「何か食べる？」と聞く。食欲のない子どもは，すぐには答えられないので「別に」と言う。食欲がないのに「何か食べる？」と聞かれたことで子どもは少しイライラする。母親は何をつくっていいか分からないので「何か言ってよ」と言う。すると子どもはブスッとして「オムレツ」と言う。やがて出されてきたオムレツを見て，健康なときに食べておいしかったオムレツをイメージしていたのだが，それが今，体調の悪いときにはおいしそうには見えない。胸がムカムカして食べる気にはならない。母親はそれを見て「せっかくつくったのに」と思う。親も子どもも何かイライラしてしまう…。

母親Ｂの場合，子どもの体調が悪いのを見ても「何か食べる？」とは聞かない。小さいお茶碗にお粥をもってくる。そばには小さい梅干しがある。これなら子どもは食べられる。そして「よかったね，全部食べたね，すぐによくなるよ」と言う。１時間後にまた果物なり，アイスクリームなり，ジュースなりをもってくる。次は白いご飯にネギとショウガで汁をもっていく。この母親は日頃から子どもの好きな食べ物を知っている。それを体調の悪い子どもが食べられるようにして出してあげる。だから「何か食べる？」とは聞かない。

自分の思い込みの強い母親Ａは子どもを見ていない。だから子どもの求めているものを理解できていない。愛情のある母親Ｂは子どもを見ている。この子は「このジュース」が好きだと知っている。いつも子どもをよく分かっているから，体調を崩したときには，子どもの好きなジュースを黙って出してあげられる。「愛している」とは「分かっている」ということでもある。

子どもが心理的に成長するのには，母親Ｂのような愛情が必要なのである。子どもを心理的に成長させる愛情とは，子どもが求めていることを理解できる能力である。もともと愛情とは相手の求めているものを理解できる能力である。

思い込みの強い人は相手が何を求めているかを理解できない。子どもが何を求めているかを理解できない。だからどんなに子育てに努力しても，子どもは心理的になかなか成長しないのだ。